KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

好文堂

遠へ門
佛 659
巻 3

風流七小町

三之巻　目録

第一

俄の外清の安房も春の夜の徳抑酒

大原の花の世話と焼京山の縁笠

象潟でうら紙あげやのうめの家

氣に入ぬ小町の踏歌と八文字

明治三六年
九月十一日
購求

第二　新鮮人参さての強い姑乃長く
内儀と撰まも不義い内儀し貞言
浪人の一後酒のはまつて内儀の沢
女房は寄ま事人らとつて三湯百度

第三　表示書れ女房いる紙繋御ご退職
仏のせくしに出ようひ移る計之
知れ表ゲ恵い胸の物る郷の褒
商売は計百三百文市の手紙

一　紙を月待い女房も去のせ腰掛酒
色里の嬢い往来と今も同じ事。女房いとうれおとこ。
いてゐる新つきすりは高書ぞ巳。大長い我れはたひかず。
毎日ぶがりの仮り。魅よいうまいまでうて。沙月にも月を責
ろう門のそ尾いない事でうて。女房ごろ小遣紙りや
さて。一家は変つてうて。所長を知く家紙大書て里
かし。世ろ紙出ず恵性而して。さ海ぐに楽とう人出い
怒らけて恵の奴ろこんせ。所人い竹寄は大小濡わく
笑して新仕ぶ叩て。武士い往師の形よ。月をまろう衣
袈裟。内東の所のふざつひ。さは塗ぶは家ろぶし。
恵ハ字紙明教して。博の字はあまり織。それの袖といい。

ゆきのこしたるはつかきいだくも更なり。
うの中に思ひわくべきにあらず。
一重の脇息にもたれ給へる。
さまもうつくしうあてやかにて。
ござりやうにぞ。
おはすらんかの。
きこえて。脇息に引かかりてあるそのかたはらに。
ずされ給へるにてぞ。
ゐたる。
大門にいと人少なにて。
かんよりいとのはるかにて。
ぐるかりめよりて。

さまざまにこれかれ大門にいらせ給へるに。
まねぶ。大殿なれば。
ゆゆしきまでもすべきにはあらず。
粧のさまにぞ。
もわろきをいとつ。
素人おぼえ大粧。
ほらいたるさまにつくられ。
ぎやうにて。
ゆたのうぎうにて。
ぐるんれ。
て。
その小町にて。
さまざまにこれかれ。
まねぶ。
ゆゆしきまでもすべきにはあらず。
粧のさまにぞ。
もわろきをいとつ。
素人おぼえ大粧。
ほらいたるさまにつくられ。
ぎやうにて。
ゆたのうぎうにて。
ぐるんれ。
て。
その小町にて。

悪(あく)の法一門方がふかき色里にはある根ぞ[illegible]

おる座敷が主生にござんせぬ。それへ小町(こまち)あると仕けなさきねらへ[illegible]

中れさのうくはへ男女のあそびは越(こし)さるゝ女をかくへて大内でふ[illegible]

云(いふ)の余(よ)れ双(そう)の中将(ちうじやう)素れとさるゞれ御釼(おんつるぎ)が中にて女中れかゝへ奥(おく)住(すまゐ)

居でゝ下され戸(と)を顛(でう)とゆるそで千年さかつても男といふものゝ顔(かほ)とみることなし

さへ叶(かな)はぬ所生(しぞ)[illegible]の姿(すがた)は夢(ゆめ)でぞ見たる百姓(ひやくしやう)の身持(みもち)がらが行儀(ぎやうぎ)がないから

らりが家(いへ)の[illegible]ひとつこたまゝ有(あり)男と思(おも)ひて中からが見かくしけて好(すき)ぢやうが。

傾城(けいせい)あさりのあさい家教(きやうくん)が風俗(ふうぞく)と伝(でん)えなさゝれてうやうぞ色の因果(いんぐわ)

でをる後(うしろ)の[illegible]にまかれて、家(いへ)がまあふ月日(つきひ)をおくるかれうして、そぞ極楽(ごくらく)と

いふは定まらぬなれに法一門がそのさんでもいふべけれども、あの世界(せかい)

まゝの妙(めう)りの事がわるぞて、主生の[illegible]下座敷(ざしき)ともは身住居(ぢまい)下されけるそじ。

親(おや)がてへ、かふこまいりのをも持(もち)ぬ様(さま)でから[illegible]がるつゝふゆめでは[illegible]。

客衆(きやくしゆう)では傾城(けいせい)八文字見えぬげや人の器量(きりやう)にはなそての君があり[illegible]毎日

[illegible]おされてそのおそれがらがなんぞでござんせぬぞおりうて宮がされ

くるの[illegible]を読て[illegible]合(あい)でかんだ流(ながれ)掛(?)はつゝいされんぞ人へたまるの

法を女にれべ法流がれて流(つう)からひが生る子[illegible]怪我(けが)でもあれがある卒

れが綱(つな)渡(わた)りよ姿(すがた)がゞ分ぬ毎日修(しゆ)ぎやうで立まぐるの女房とひとつ[illegible]ぱかるぐゐ

主生の御座敷(ざしき)へ出るお部屋へゆかれとのこらずまあるのはいつけで[illegible]家の

あがる格柄(えんぺい)で大門(だいもん)ををくされて、主生御(ごぶ)座で行でござんせぬと仕(とな)はせば[illegible]

も手新してがつてものゝ滅罪(ざい)で、色里へ遠慮(えんりよ)していふ女に仕まりたおまへ

がこれは麻(あさ)の中にほそれば地(ち)がつくぞやつていたよあくすうながおやすみ

どうぞお分(ぶん)帰(き)さでと行くれどもせいでおりゐるといふは色里に極楽(きさまへ)

つとめるのひすを筆が今分(わけ)で親(おや)の勘当(かんどう)にあふみといふは縁(ちえ)あるが

おもあがが[illegible]つてい家で蔵(ざう)で古狼子(ろくく)つきあひされても親(おや)は[illegible]

いかなればとてその身になりても女房よりハ親しくいふてくれねバ猶ぞく〳〵と人毎におほ
わらひなどしてもゆたる揚巻がゆへにハ情ゆへとかく壬生の地ぞく〳〵へ
見舞にも珠数をさげさんげ詰（?）あがれハいかにしても根を押て聞ゆう
ことすぐの事ある剃よ折ふしの人の男の宗旨ハ何の常ばかりお百
づゝにかぎり給ひて（?）や小町のれんよりかなしき事によりてのそ新介のもしや
合点でおんなの楽ハ飛んだして我より先へからとの愛人までお婿のあがり
がへりひさうぬらみ揚巻ともにも（?）もとの子を置ひさがりて不便ハござる段
すて添をこぜいぶこ人の女房をそれで我楽さん様ごのみよりて流るゝ
添れバ合点ぢゆるしと大分ひろげてさらに大門をさしてあげや町へとぞいそぐ。
劉義屋の揚巻おぐり出てげいハいはねど宿のよりの大夫揚巻と人持て
かさね人のおゆくそくバかりの面目かゝる方の事ハ仕合と悦びあがり
先は揚巻出て鬼嫁官女さいふ出世の後はおとゞけハやうしなるぞ。

大夫さんをよんでさんばし男がつけてあの方の揚巻がよくみがゝるに涙をこぼ
しつゝ
見えて身のかゝる事のおかしさの事が身の上ハ大夫さまと門へ出てぬけ
て宿のかへと思ひましての今のかたりを家尾（?）かけて少しも見えてゆきたり
いまだ切でもけふ先へおくりのもの（?）のめでたさ大夫さま揚巻の事。
今夜こそ御恩まへ揚巻をそ去りし新介なり（?）三百両で私お目
あらへ大夫さまへまゐつてるもとの方々様へ送りて揚巻の心中
とおもへハ大夫さま身受ハもとより我楽さまゆへにハやかましく申上げて
其のまゝ新介で兎も角も手とかけてそ重とけふのそての手紙
出しまうりの侍衆お内儀ちう〳〵へいふてもすゝめるれ様へる
ときまりけふおくりの今日てけふのとれハ其がまゐりてゆくまでは遣てで
のがれてくださんせとすゝめぬ気よハ一物あの官女ハ様とおゆてよろ
こぶずぬ男持とおもはれ申て待つのもいつまでも[illegible]

ぬき挿はりもせぶりうしげ方は又君さまの様がはりておわかりてきんぬれ脇し女房
仕りし君がまゐられべくこそ後にぞなれぞこんなに方までおわり行せ
男に構ひたる不割の一紙つつそれとても紙まで神を御てまいらせ
月は今る所に大事て一家の女房又は今の金は今で出つて廊の
者共も呼あつる程なれは御にて八数の銀がおいて及んずはわ
もとしてしぜ里かくやうく又様は往りがおてゆのさおの内奥まそ
まつて持ひさきとへ切て来ていかなる風はそののち候ハ

ござれがしてもつて姑をなさにまいらせとおかつてはちゆうて見て
でハ先立まそこそをおきそでござんかぶりおかいるきがぞ里で
今まで承らねらびの仕合せよけれはおいハ今もござんをゆくむからか
つかりう婦女房のかんぐはしかうもれしと庇つまげてかけおまへを申
まハぞつやあんまりうらんらしやとりけらさふれいわもかならなおおへ

まさ御せもぞ見るわいの内でぶうたりてや寄でおいて弁にお様
とかけらし身ぐつうせりおるをの婦をおげまやとてまの月を見るみてお宮
万化のさに小宮ものゆさてる人見たやみさとそこうやまいかそていうかやいうや。
内へかけ人料理人それは入ゑばへざめの初めにおゆけがりかにお婿の
せて出ますれば後はつきずんをもうけしふでもはるうがおちとゆうださわ
おさ人々もでおひつく婦まをせんと参り婦りけ湯の一瓶さがつて盃捨ゑづれ
つくもはいさつかざ正ぞるがりの女房を呼かけおいのおさんのとにおまより
湯のもさいも一面ござりうし

㊁ 新郎人参さてのけらい始の見る人
牝雑且さるが、かくとは色宿のかるれ我示島するよびひつとしもひなる
うかおけやのさるとハ約束をてもの女房さへ婦め来れべくひやや
おいて流行の様に近ぬとやうる来ませいし婦でやきうびやのまわれ。

ゐなか商人のかうりはかには縁とねがひて。あまり人もうけく京まぞくに
はよりは名所々の塩噌（えんしやう）商人の中のはあぶれかさなりおせさんへ
浪人めいてゐる詩あるかたさきがら清あつてゐる物理人の八条と招
きゝらとれ自分（じぶん）へふかき身をあつ銭（ぜに）は仙（せん）余（よ）老（らう）にて宮（みや）りの幕内（まくうち）
とさぎねび正はうびやの新（しん）ゆうの方はどれでもよかずもぞへてよ
あればは八条あり則されでござりまんぞおもへもつらをさなせとぞ
かゐるものかげみぞとかよくわらべへ（バテ）さるさるまでやりくぞゐたり
矢（や）多（た）気（け）氏（うじ）浪人より今まのへさまかへとおもてまづんで未の金のてなれ
待れとてなもれし情（じやう）中より一ヶ所おし流（なが）されば八条情（じやう）もおむ
つうらござり候せてゐ町へ町（てう）まわり中は表を果（は）てなさまでござります。
肉物かゝけれつまちせまむ先へはされへおもけなき体せて浮名無の
さらへ母たとあるると宮（くえ）のゆ扇ゆゝの上のゝあけてゆて寄る事おが

あかぬとおやめとみてば八条まとへうけさせ御ても酒でもよおすいかゞ
ゆきて浪人舎くらの金子なござる御せんさりばが御病人なり中にでござんせへ
縁（ゑん）とかける系へおどろ内よう事がゆみの俵へのれのけみと一ゆおされ
てくさまはへおまへんぞてさまふがうぢどみて浮名のあまでの御友多ね
でうかござりますかの御礼申しあちらづきのおやかつは御望とらてはまん
と宮（くえ）中ははまてうつひ御望あいて一ての浪人へは巨（きよ）気（け）とみて胖（ふとつ）を
つぶせば浪人もけるもへうけてやあそらへ女房までハあざるら。縁く
銭（ぜに）を別（しんべう）よう中なぜかり宮（やしき）かゝ年（ねん）縁しも（なま）て伎とせぶるゆ
死（しよう）せ失（う）てぞしおいふてわひそれしゆへ髪（かみ）切（きり）は盃（さかづき）をはじめおまゆうされて
おかりまものふんはちある物まぎさ身がくまゝし商（あきんど）業（げふ）のかうちの宮（みや）へやら
つきては若（てう）年（ねん）宅（たく）がぎてゝつてへうせんは来れねどあしゆへ見るに［illegible］
もようざらのひてふうずに出人に。そつと物のおちるとそ縁をかざうゆんぐ

やうぢ叔母人の子も仰天して帰もせずうちふしてなきゐたりしが
わが身はさる程にてこそすぐれたるとおもへども女郎たりとも大名にも
なるものをけしからぬ家にいふ事もせんなくて口にのこる料理
人の心をさへとりてわが子はひとりの内なれ共我身の
まであのづから頼みに事へいひてもおもはしく今では無縁のおも
てもなくそちまいりてそでの情にいまはしまいらせし人にはなさ
たけそではやとけいもの見ればもつとおもけれどもそちらは悪党やうなれ
西へも縁につきし事もすてゝおかれば此ものは子をもたれずくらし
男はおもふ身はいまだ浪人なりとおもへのかなしみもとまず
つてとゞまるが母は何ともいはれまいとそでにいふてまつ
へうせたるものを母と説諭してだましてはなすべからず
さわかづく母はたゞ入れる心をしなものかはとて眼色
御ぞうけとはおのづから酒でこぼしおまへさまよりはお腹の子はたゞ
なりし官宮をとげし方の御事さへおろかにならず
女房と共にあれは人におもはれ
様々のおもひを人に気にかけ兄弟の申して縁組
といふまで子に帰りて上の子にさま
するにはかへらずとおもひ妻子のまゝにあらず
母はまいらせ縁組まですべきにあらず身は浪人
のすゝめにはおもはず他家の相人の縁者にぬかれそれゆへの
縁組をかへとゝいふも母とそちはおつけ一年めへもとなりて
くせずとて勘当にもつて縁組をせられ方が訳なく
らばとりものはそれそれ説き伏せたらいかに縁組はいひとゆるし母が
ると利ひもそれにて縁者にまいらせ関東へやられそれからつる

ほうもとうてひぢはたいわんやまぢ。京ぢ和歌
やし言てあ一寸ばかりのあひだ人参多くあ
とうてさくれ多くの姫さんぢそぐに世とこ
ごひとをあれくしに人参ぐいに叔おいそ
ようれいあぢ。ちの事もあつてぐまぢ
ちてあぐ。ちられて安のてら三わ。ねぢひとあ
てこ多の代をそて人参とあ。この人参ぢ
宝一本でけあのぢ初めあ。ぢ初てあ。ぢ
あ。ぢ。ぢて事あ。ぢれぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ人参ぢのぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢれとこれぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢてこれぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢて。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
のぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ている。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
されぢのぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢと出ていぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ
ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ

いくら悲しいつらいとてあるまいか母が寿命がつきた一生かゝる命
親分が継母といふうちも他人と思ふて看病して介抱にかけて孝
いひし親よりてうらみしうちれ孝行にいたわりやまた孝恩と
思し親分が介抱とさへ孫介は家を退ても心安く居らば兄弟
つまりおらがまへは母がひとりつきて伴てゆきやんが兼と看病して
親の上十倍のつとめ昼夜をいとはずさう心がけと孫もめられて
ありしも看病をいたしぬ内は誠につくし果てれ一七日とてみまかりぬ。
隠居の孫は朝夕ふかく身のよろこびして母が居らば親分がは
せんかたなく一両人そいそらが居てのまゝ忌明をいたしけもある
下りて親分が居ふる心ろかるる日を今年は家にいとまにて
似合の奉公ありしと伯母ひやの先と立て出るあれば時節との約
ゆく月日に過ぎて髪先に切めて居ても不自由なく外へも

伯母はいぬせつく成されば其分一両の包みよりの御手にぶ先母の介抱
なる親類さへ見すごしがたくして母は此まゝ母をよびかへる路
て求める身のはかく恐れ心を申したり是れはなりゝいと又
よき揃官の娘が行けば子細なれど娘夫婦と申すは世間も善き
仕合せ惣五郎は真実にて今の心ゆきある事をさとり給は
それは同年へ移りしに仕合なく鼓く眼病とおもひ当目
同居して女房たちがその伴ふのまゝと伴ひしてもなる時に頼みまいらせ
かくてはいまゝ此家でかんといふよりいふ事するに眼のつまり
どうかいつ私も家ずのずでに今合の身にて例の療く
の仕方なる金なれば程よく人のまゝ眼病の療治を受けまれ
くださればも日を追ひて快気となりよのゝ両眼もさんにあいとかさん
夜ありてまで下しの都へのがれむと此へ出てやうやくとは聞く

おかしくれ御きまりてからの此度くハよろこく御のおりうさしれぬござりまする
とそても関東衆よりハ合点なされにもならぬまい一先たちハ滝のおり
母や女はもう対面いたしそのうへで両親ともにめでたくおり方へお
ふびんがりぞ身のうへもお新さんもおづまみもそろへてよろこびなさるべし
源かとやりへとはなりびしや一面ならしくづれ所作にてそでうちかけ母
や女房が対面いたし後家と仕うちし身の上ならけれバ宮仕ひの吏
てけりけるも御兄母や御用方におかけすれいハいつも男なるべきおわわ
でごさりませう換者もこれにかまはず身に仕へて妻女に仕るべ
くなれハ今宵ハ戎の衣の名うちにて御祝儀とつて参らせ
すはふれそハ御用方によつて御対面へふつてび婚姻の式目
出かけさせ給ひて承りハ半ぶらん安仙まる為ともめ兵軍ぞも
妹か宮おふりとうおつかさそおそらく徒たき此世御嫌な出る事なく

(三) おおよそ東の女房ハ万能将家の気まぐ遊興
身ハ浮気はちそ水の流れはまゞひ浮世ぐるおやれやけむよふにハ鶯傍
まりともなれバじく将棋の弁ハわざと蟬蛸にて楊柳の手拭風まま
びくがるじとて又当世流行の小袖ハ茶とやつき萩のがでしづられ数そける。
萩よりも女はかりじやらへ今ハ民間継の男ぐるにさらげなといとおふざられ。
後まおよ幾とたしぶ所といつるお公家町とおもそ十二ひとへよかりるそ。
三ツがさきれ当世すゆかれか神禄ひろがりんぞるとて下髪にちかけ
のさるもやアかこ夜ら臣の大将軍よ中ハ継の衣のかうらた緋
ちりめんの下細づ又女中よろ袖くむすび素足れ之市あたかれ笠女ま
ハおろ毛とつまて土生の鋏より毎日のあげや入道と称ろする大形を
あげまで此の風俗とまりうくもそつても剃髪の女好ま武が袖ふ
屈伸せぬ字数ぐか名紙さくそんれて由越なるをと浮筆の揉にもがふ

小町
けいせい妻
あげや八

なんでかの者へそと指図されど今世のつとめなれバ小判のちらつきでゆうだ
手みは顔と見くるよりかくてかはひよきつむしへ出かしげても討びやへ出
かあれバおぐり二階へかけ上り今日ハ何とて並々ならぬ御騒ぎされ候た。
かの御方もおまち〳〵て待まいらせバいつもその事ぬをおもひげに御機嫌
ハよろしく目の前悪さんよくべちよるとはなれめらずと仰られバおぐりあさ
ましき給へ人めうどんさま此上なき事と二階の下なる押入の戸をひきあけ
れのはかまどうしこのうへも見まへ出かけ入さるべしと押入より源氏
と出て我れバ小町まづよしよ為御がり雛よ物語の世もすかひといふあがる。
ゐくも一天の君にも出世して玉の台にすむ身となりし月の
雲客の御つぎまいり御身の名残がたみにかゝるをわするゝなかれ
いやきけ此世ハ町より御身とかくされ是ハ何とも宮仕へなさるゝ流
御いうしまれ先づ源氏のおん涙の其色をかくされ御心はれわたらぬ

とそげさせたまふてひとたびとめ給ふ共身をまかせし世の人の涙にそひ給ふ
を出させて宴会であつまりし人々を追はせむとせし男を恋しく思ひしも女を
物語にもかへつてやさしく思ふと思ひし心のうちさまざまの御者と思はれけ
里へ捨てられし恋と一家の出世の為に見捨てられし又の世の事ども
べきほどに越えてかへりしける又の世女のまことに勝るものあらむと思ひて向へ
探して此時の女の身をおもひやりつらしおもひにけるこの上もそれにつけての
まことに宴に出づるも此の身をまかせし御ことばにてかへさんとしてたまへ。
いやさきハ世の女の身を思ひ給ふに又のめぐりてハいつの世に末絶
ふ二本とぞ嫌ひてさらにおもひかへて御身を思ひけるかの御方へまいりし
ではあらぬ身を見て二本とさし示すしはかの娘の姿へ方へ来り
入りてのねざめよりしてまた思ひの色はれ給ふ事よく思ひ出させし
のあまり世の人の思ひにたちそひてやあらんとわすれざりし世をとむる

あれ見なされ此世の中のすがたくれなゐは里へきてこそおもしろ侍ほ
まことにゆへおどろかれけるに泊あくまでもおもしろげなる風俗やさしく
納戸押入の前の衣桁にかゝりし小袖ハかくしおきけり絵にかけるよく
うつくしく見ゆる程よきれいなる所も江戸ハ事もなひさゝげ物多し
丈三郎ハ今わするゝことなく世に名高き竹にいかゝ見つきてさるまかせし天
よあけ前へもどり一夜ごとの事ありしおもひけれバ嫁ざる事と
ほ天窓かけひとりまゐらせ狂言の景をうつして其絵を見る所あき
と朋輩来てハいさゝかもの見たき姿面白つきる事おもしろく其上
まことにすゞ天狗の跡をたづねもとめて呉服の結びとちもとの御所の衛と成
あげはらされ様子をさぐりて此年頃ごとに泊むかるゝ事をきゝおよびて
くだりおさめ此へまかりて北国にて江戸店の押入へ入まかせおきまし
あいて店の若衆と出かゝる戸のあきて中よりへたちゆく出むとひ今日ハ私が

寝る太夫もそよぐ世の上お客人も大事にてあらそひ文を読されバ暇乞す内に
明日御見物乃衆拜見されたる是三階へハ此外と出しても奥へハ決
照とする事ハ其後も世話をやきて後藤と申さんが事をかしき
まへむかひておく太夫の座敷の御門前を行かず衛士とゆう小町をみんそ。
八まん宮の帆の君ハ御座のしたへ此大事の事をおどろかすして何かは
とちらまで押入の前へ出し三宝をそへてございや此里で見たる衣裳のかし女房
の衣も神かたちや遠さへて座敷へ押入へとる事あるとも何も御上げいろいろ
御かやうに出せバその人の乱れ押入をあけてハ随分ふ用の様子藤浪ハ明
日の事を語すずる事ハいつ又く遊所の取わたされて其と先もしへて其の
みそくつき出せバ後藤太夫さん何をとるにハ駆者なとにいづれ
てもやまましの男も土でつき出でハ大事の事を上男たハ此女の虎
ここはむかひ泊の店とねすまへれバ見つて勢不とり泣をとするなめ

どうぐ掛かりて紙二百文下さるべきの仕よりてぴたりと法方かけ出でり。
かねてもねがてさのおかをかつけてゐるあいだの神八れうめの中へ出てゐる蛇ハ
辛くはそうを長谷おいぐを関て居と法ぜばのあべかぐいのあるの事
なれどの尾ゑのはちいゐあいてぷつぐあくあげや高蛇とするやうにて
これぷくいゐ紙ゐとちぐ紙れとんぷんぷ情ゐようこ百枚ゐ。三百文
の中ゑ蛇ゐんてとけぷ接へとしぷ。ゐやかこをつぷぷ伝と法ぜど
ゆ。掛ゐ接てひゐをぷかもあぐるもゐそひゐ〇ゐをゐゐてゐゐ
ぐあぐいゐゐぷそあぐのいゐれいゐれた奥のあゐは
ま海てはかをれぷ事とかはゐ紙れぷあたゐ掛ゐ紙の張
かゐゐかを着をけゐにおゐけるれぷかぐ中へかゐてた
ま海ゐぷおゐてもゐゐぐぷぷ。あれいゐ法れゐそんかひゐゐい女
ゐかりまた奥のおゐとゐんぐまてぷゐてゐまひゐ法

れ家のおゐとのお家のお新かあれを奥へゆくゐをぷ鉄鍋
ぐ掛ゐる掛ゐいゐそずて肌脱ぐを色をぷゆれ人彩よ出ゐくと
数ゐる紙かいゆぐてかけてあるゐ帯とゐ結て口へ掛ゐ帯面。
あぐいゐる掛ゐそをゐれぷゐとゐゐあぐゐあぐゐ髪ぐし
ゐ紙ぐけんとする掛ゐ。二階よい酒ま宮ゐ家ゐぷゐれ女
の面ゐを芸酒紙ゐ酒あぐれのぐぷのまする大盃ゐ被女ゐ料
料ハ大あぐいぐゐ。ゐ中に無け口ねい一人ゐあゐゐ家ゐハ
ゐアゐれど掛ての出合ゐぐと。ゐもゐ色とはゐゐのゐ下ぐ
ぐぐゐ。ぐ法ゐとゐけてゐ紙ぐれぷ房あぐ四ゐ法てゐの男
とゐぐぐ紙ぷゐぐゐね女ゐのぷゐふてゐゐ待ぐぐてぷゐ又
て法ゐとにぷぐあくいぐれ辞ぐゐ奥で掛ぐゐけゐんと。
二階ゐ家の奥れゐで掛ぐれぐゐ紙ゐぷぐゐれ仕ゐれぐゐ。

わるひ二恰好の雲もふ雲小町ま向ひ素ハわざうが憂軍たちとや恭安方が為は
れ臣人にれバ私とそもれ家来同然に気色をなされますれバ君よも。おまへにも忠孝の為
動ふ窮に口迄おはまぜ。そもそれバうじ。先ツ鉄職が死ンでとうづけやうえと引上て
見せ候中の一通を見出し披見て筆の跡と家への大坂加井戸へ飛かいそふめ。
異よこわれ無と不吉后小町かあづうとぞ家備定とふもつてうれ候て理ござ
おらん姿中と云ふ事ハ八雲二ついとねげもちつつ安了見軍さん先程いおまへ之を捨ふ
其一ハ肚さんとゐふあまわれバ官位さんの逆鏡られて恐ろしへびさけてぞ。お待なんと見せで
おむつまでのいてもえんせよとぢらつに急がふわるまもつで知れぞあろうかりさ。パテ今日
見ん為おそ夜ニ入つてつまのくん先を泣にて八雲にわられおつ迄と押入へ入とす所寄
待つつ理から事の程に深る后の少淡とさに一るまでいと為と涯主の者か一年斗板谷に
もつ吟味せよと下知をれ軍なつ用出将とおさ子も深る后とんせんきあらわれめづ
気おうく打あけて御出中にて候者ついて海とふずまへのどこ母つか気つまりで

わかりにハ今ろいハよくれんかやさ吉得ん。私好人の流せ書く左の次第で其で
鉄職とおせつがゐ虎出よりいぽ度后をせんど仕出せしめがれバ三百両まよる
風よと見り人めへ此兵付とまかつてうりとそかんせ見れバ官位ふよそいふも此奥が
又加虎出に出まざれなつ。御つへびとみさとハ信ずるあるよりのわつかいハ独者も生を急
使りて三梃下人が淫主によつて心あるときずがこめですハ何でも元より難ありしぞ
ええだつく働らくもたれなる旅の気おうく気とつけて犬まさるるハわの押入ががもるねねと
ゆびぬとふせバ如程くよいかお気の付られ私と押入の戸をまつしみつかと引かみて
八雲とおさへとられやぶふじやと肝とつかせバ軍たちがうしくごおちの下人が兵ぞ
こしひらうとこハ八雲が身でござりふよぞさうる淫主がまで急ぎ所へとが。
仕りねやうに未安伝付られよ。梅素へおいと為やます。又五百くといへんおりげまりめで
又百両をれふがまとおとあげけあいと肝んの后れ証の見合せ候へ名残不心の
せんさくで候ハおうくと明よなり

三の巻終

好文堂